第 42 回　縮小社会研究会

時：2018 年 7 月 7 日（土）、13：00～17：35
所：清泉女子大学　231 教室（2 号館 3 階）　東京都品川区東五反田 3-16-21

今回の主テーマ　「科学技術の進歩で大量生産文明の持続は可能か」

13:00-13:40　人工知能、ロボット、IT は縮小社会に本当に有効か？　尾崎雄三（縮小社会研究会理事）
人工知能、ロボット、IT は経済成長のために必要なイノベーション技術として推進されている。特に日本では少子高齢化と労働人口の減少でその対策として期待されている。これらのベースとなるコンピューターを中心として、縮小社会の要因である資源、エネルギーの消費や人工知能、IT について予測される問題を考える。

13:45-14:25　科学技術の倫理問題－私たち科学技術者は何を目指して研究開発を行うのか　五十嵐敏郎（金沢大学非常勤講師、縮小社会研究会理事、もったいない学会理事）　科学技術の倫理問題は、科学技術を行う組織の倫理、何を研究するかという目的の倫理、科学技術者個人の倫理など非常に幅広い分野にまたがっている。ここでは、急速に軍学共同路線が進む中で、これに抗するために必要な組織の倫理を中心に述べる。最後に、組織の構成員である科学技術者個人の倫理の醸成について、会社や大学での経験を基にいくつかの可能性を示す。

14:30-15：00　空き家問題をビジネスチャンスに～そして本当に送電線は必要不可欠なのか～　橋本正明（市民科学研究室理事、市民科学者）　現在、日本の住宅の 10 軒に 1 軒の割合で空き家であるが、15 年後には 3 軒に 1 軒の割合にまで増えるのではないかとの見解もあるくらいその増加のスピードは早まっている。そして他方、再生可能エネルギーの普及は送電線建設の問題により、近年頭打ち気味である。私は【送電線に頼らない再生可能エネルギー発電所】を空き家地域に建設するビジネスによって、地域を活性化させる方策を提案する。

15:10-15:40　日本型アグロエコロジーの概要紹介　長谷川浩（NPO 法人福島県有機農業ネットワーク理事）
アグロエコロジーは、生態学などの概念を農学に取り入れた学問で、持続可能な農業と社会にとって不可欠と考える。諸外国ではアグロエコロジーの概念とそれに基づいた実践が広がっているが、日本ではほとんど知られていない。一方、日本は温帯として最も降水量が多くて夏は高温多湿な気候で、乾燥地で構築されたアグロエコロジーには限界がある。食の意味、微生物との共生、進化の概念、単作から多作へ、土壌の重要性、自然生態系と農業生態系の違いなどを基礎にして、日本に適した持続可能な農業の事例を示す。

15:45-16:25　縮小社会において科学技術は自由民主主義の持続を可能とするのか？　山本達也（清泉女子大学教授）　これまでの政治学は、先進民主主義国の民主主義を「定着」として表現し、「後戻り」することを想定してこなかった。しかしながら、近年、ヨーロッパでもアメリカでも、民主主義の「脱定着」が懸念される事態となっている。背景には、縮小社会に突入したことによる経済的苦境、ソーシャルメディア等のネガティブな影響が指摘されている。他方、インターネットが民主主義を質的に向上させ得るという希望の声も根強い。果たして、縮小社会において科学技術は民主主義にどのような影響を与えようとしているのであろうか。

16:30-17:00　成長と崩壊の文明論～セネカ効果を中心に～　大谷正幸（金沢美術工芸大学教授）　水野和夫著『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』（2017 年）でも示唆されているウーゴ・バルディ教授の「セネカ効果」（成長過程に比して崩壊過程は急峻であること）の考え方を中心に成長と崩壊の文明論を語る。

17:05-17:35　全体討論

懇親会：18:00-19:30　場所：清泉カフェ（1 号館地下 1 階）、　費用：2,500 円
参加登録：下記の自動登録よりお願いします。　研究会参加費：会員は無料、非会員は 500 円
http://confreg.ate-mahoroba.jp/confreg?conf_idstr=f2A735a8QRHATy0dRGABHinx1009

一般社団法人 縮小社会研究会　e-mail: jimukyoku@shukusho.org　HP: http://shukusho.org/